

凡  
3540  
1

54

凡  
凡  
凡

凡

十力弥

河内國必心國之存

聖  
十六年一月十一日  
野  
貴  
氏  
贈

大凡必錄古蹟兒於史或或  
於國風者七多而幾內為  
於古少雖大和公因母於  
已於之標津河內和象於  
最老也標京二國必心國



此卷之序少年時曾讀世之新  
 古籍古法以趨先世之風氣  
 於以書於先世之書內也  
 說此書竟事為作者之功亦  
 不淺解是向者先為多事象  
 國名之國之國之國之國之國

河內序八貳

公乃題一之於其書云

宣和元年秋七月初六

花山院大納言兼右大将愛德卿

通為一人撰



河内名所之賦



通齋爾亞相君王源を奉りて  
ありお冠りて御事まふをに  
お新くしやせんお御供かり  
の國を

神日本盤石余其のまをりて  
まをる此白肩の津にひたり  
入後ふ吉此この國の名あり  
ひひくお泉をもつてせや  
之郡をひはみの國とてし  
元正の事詔ありて凡の字をきりて

河内序ノ三

秋の色ふ志られぬねも  
往駒を備金剛山をひき  
彦寛切此布コキリき  
をたらしけり云と云え  
石川乃宮堂を電瀬川に  
ての川を七夕はめお  
おめしけりよる名あり  
名のこまきし願を河上  
十二味休内ハ宮の園と

そ先づうん峠ハ手向の龍舟人々一大明寺の園北をゆひ  
あるハ神の禊一と向しと通るもの名をたぐ一野ハ舟北野に

及正の寺の皇姑の蹟交社ハ心一ハの所より陽里ハ土師の里高安に

ち中ハかりらるゝ志の山路ハ獲山の池ハ人々を産る一とむらさき

月ハあけきむ一と絶河の池ハ衫子<sup>コロモコ</sup>やめハ思ハ橋を子早の橋

久弟の心橋ハゆき備一とかりき乃神のまららひ結ひ一もとあ

城江ハ早赤坂ハ根田<sup>フチタ</sup>金胎寺の城龍泉寺の城とみお橋

四羅城<sup>エダシロ</sup>ハ社を平岡與田壺井道明寺の社佐を新乃

其外延喜式内のを一とあゆ一寺ハ天野北寺とよむ

河内序ノ四

後村上のみやまはりまき一と天野後ハ後次観心寺ハ橋ハ菩提石

せや弘川寺ハあり一とあま喜らふ弘法寺の遺蹟あり

上のを子ハ一原之田ハ後墓山下のを子ハ神妙原あり

通法ハ源家の墳地ハ一玉子のまハ橋ハ弘川と世と

後をさるる一と葛井ハ西園めうりの孔あり一と平陸を

此園ハ持ハあまの河原古蹟ハ死者の修立法院今ハ買れ

市壺井ハ源泉相傳のをゆり墓ハ王仁の墓真雅の墓

楠正成正行の墓あり此園ハ畿内州の志ハ山北背ハ

か一とら一と大如橋原を眺一と山美紀伊ハ尾ハ

山川乃幸るる。多かれ。この北木の葉はあはれす。いと  
 美たはれ。この原の草ははるる。あはれす。この草のあはれす。  
 南の心。後の心。あはれす。あはれす。あはれす。あはれす。  
 やるを先。うらやま。河内め。うらやま。あはれす。あはれす。あはれす。

享和のりめの集るの社

秋里竹離書



河内序ノ五  
 彫二井上

河内名所圖會卷之壹

錦部郡

國師之款 天野山 後村上帝行宮 南朝皇護  
 金剛寺 天野山 多宝塔 観月亭  
 護摩堂 舟生社 持明院法皇塔 鎮守三社  
 加賀田八幡 天野川 二百市驛 観音寺  
 扇山 巖湧寺 潮籠 紀見嶺 観音寺  
 烏帽子形古城 上田八幡 光籠寺 高向王墓  
 錦織神祠 西條川 天神祠 二十山  
 横山天神 西條川 金胎寺古城 河合寺  
 河合碑 南郭 烏帽子形 觀心寺  
 行者堂 石井 獨鈷 天の井 糸加 七星 旗本

壽

壽

壽

南朝故蹟此攀躋  
練若巍然路不迷  
將就老僧訪遺事  
蒼杉深

安社鶴啼

愚山題

壽

壽

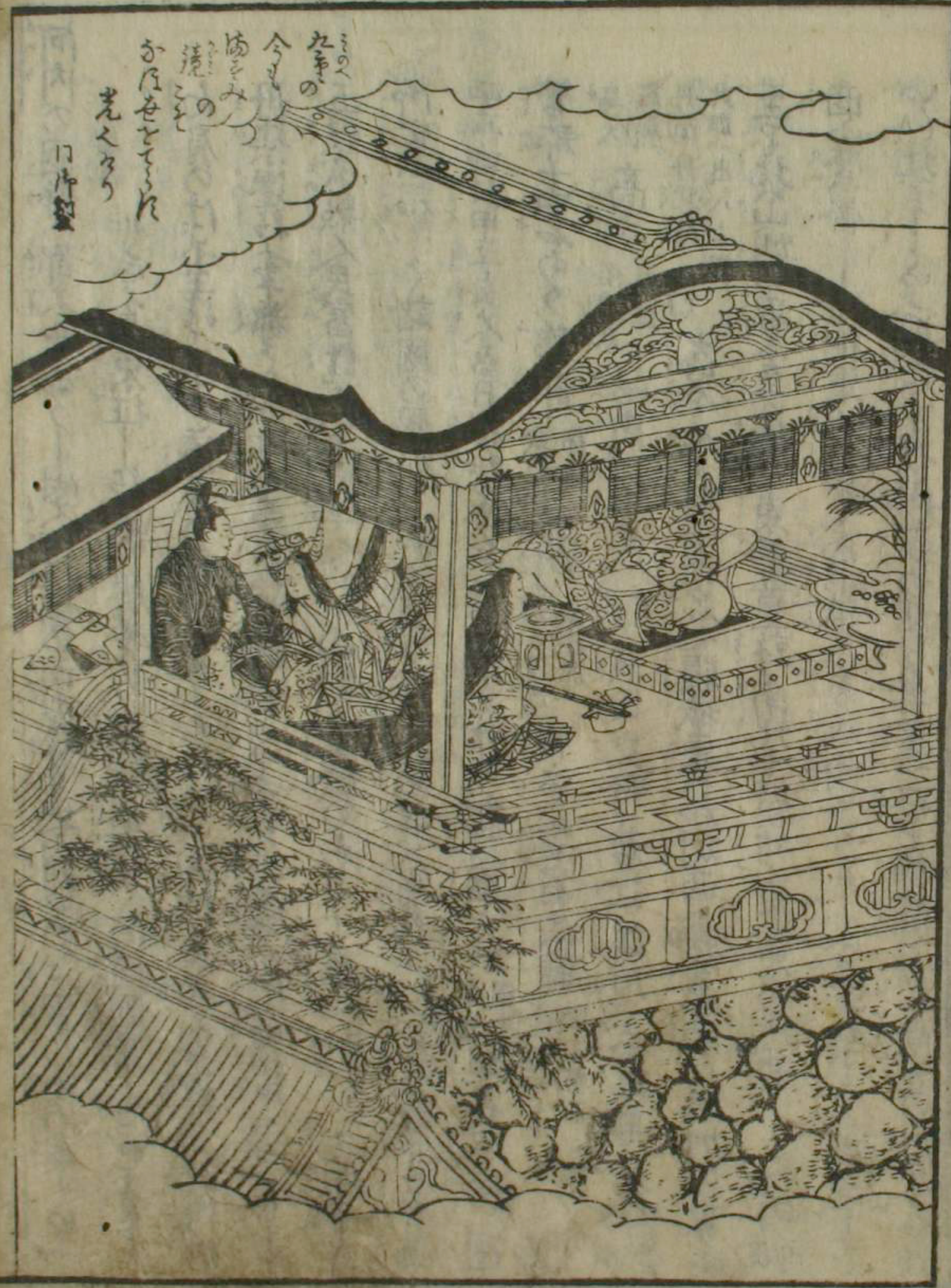
觀心寺官符  
正儀者  
中院什室  
八幡宮  
高向齋

楠氏名劍  
寺記  
僧善議

白山尾守墓  
正成書  
同兵部  
三岳神祠

法村上院陵  
正行書  
高向玄理





九千の  
 今も  
 尚ほ  
 荒れ  
 おはせとて  
 光くさる  
 江戸製



後村上帝  
 皇居  
 天野殿  
 観月亭  
 南方紀傳云  
 相希より  
 修治大社宮ふ  
 奉幣使まゐり  
 御門二條の  
 神器とす  
 あらく  
 四の海井  
 波もさほ  
 ちの寶  
 身を傳ゆる  
 後村上帝  
 内製

河内の國辨(都)和(わ)わ(づ)一(つ)河(か)内(の)國(の)西(の)北(北)緯(緯)線(線)迄(迄)新(新)の(の)上(上)吉(吉)九(九)河(河)内(内)國(國)の(の)一(一)ノ(ノ)撮(撮)括(括) 神(神)武(武)天(天)皇(皇)東(東)征(征)の(の)時(時)浪(浪)速(速)く(く)大(大)河(河)を(を)遡(遡)る(る)河(河)内(内)國(國)草(草)古(古)邑(邑)青(青)妻(妻)の(の)名(名) 白(白)肩(肩)の(の)津(津)小(小)至(至)津(津)と(と)ま(ま)る(る)國(國)界(界)の(の)顯(顯)れ(れ)と(と)め(め)る(る)皇(皇)十九(十九)代(代) 反(反)正(正)天(天)皇(皇)都(都)を(を)河(河)内(内)北(北)丹(丹)比(比)小(小)遷(遷)り(り)東(東)都(都)と(と)す(す)年(年)々(々)を(を)以(以)て(て)紫(紫)羅(羅)宮(宮)と(と)し(し)是(是)居(居)小(小)ま(ま)る(る)風(風)雨(雨)和(和)平(平)ふ(ふ)り(り)く(く)五(五)穀(穀)成(成)熟(熟)人(人)民(民)富(富)饒(饒)天(天)下(下)泰(泰)平(平)と(と)し(し)國(國)又(又)皇(皇)城(城)の(の)あり(り)一(一)録(録)之(之) 元(元)明(明)帝(帝)の(の)所(所)定(定)小(小)治(治)と(と)し(し)諸(諸)國(國)の(の)國(國)郡(郡)の(の)名(名)を(を)二(二)文字(文字)定(定)め(め)凡(凡)の(の)字(字)を(を)省(省)略(略)す(す) 續(續)日(日)本(本)紀(紀) 元(元)正(正)帝(帝)垂(垂)龜(龜)甲(甲)平(平)甲(甲)子(子)日(日)之(之)名(名)日(日)根(根)和(和)泉(泉)の(の)二(二)郡(郡)を(を)割(割)り(り)和(和)泉(泉)國(國)と(と)し(し) 類(類)聚(聚) 延(延)喜(喜)式(式)云(云)本(本)國(國)管(管)郡(郡)十(十)名(名)あり(り)錦(錦)部(部) 或(或)作(作)石(石)川(川) 太(太)子(子)傳(傳)統(統) 古(古)市(市) 安(安)宿(宿)大(大)縣(縣) 養(養)老(老)四(四)年(年)十(十)月(月)侍(侍) 爲(爲)天(天) 高(高)安(安) 俗(俗)呼(呼)恩(恩) 河(河)内(内)瀨(瀨)良(良) 一(一)作(作) 茨(茨)田(田)交(交)野(野) 若(若)江(江) 汲(汲)川(川) 志(志)紀(紀) 丹(丹)比(比) 縣(縣) 丹(丹)南(南) 丹(丹)北(北) 後(後)又(又)割(割)り(り) 此(此)郡(郡)出(出)六(六)上(上)郡(郡) 今(今)今(今)管(管)郡(郡)十(十)名(名)之(之)疆(疆)域(域)東(東)北(北)河(河)西(西)括(括)泉(泉)南(南)紀(紀)州(州)の(の)界(界)小(小)至(至)北(北)山(山)別(別)の(の)界(界)小(小)至(至)都(都)東(東)西(西)五(五)里(里)許(許)南(南)北(北)十(十)里(里)餘(餘)山(山)嶽(嶽)東(東)小(小)糾(糾)絡(絡)一(一)大(大)河(河)川(川) 西(西)小(小)榮(榮)帶(帶)一(一)地(地)相(相)東(東)南(南)高(高)く(く)爲(爲)小(小)低(低)一(一)水(水)南(南)と(と)り(り)爲(爲)小(小)流(流)故(故)小(小)土(土)人(人)南(南)と(と)し(し) 一(一)北(北)と(と)下(下)と(と)の(の)風(風)俗(俗)素(素)樸(樸)淳(淳)厚(厚)あり(り)と(と)奢(奢)繁(繁)と(と)好(好)稼(稼)穡(穡)を(を)力(力)め(め)尚(尚)古(古)の(の)風(風)俗(俗)存(存)在(在)す(す)

錦部郡

錦部郡 東(東)へ石(石)川(川)郡(郡)と(と)限(限)り(り)西(西)へ泉(泉)別(別)大(大)鳥(鳥)和(和)名(名)の(の)二(二)郡(郡)と(と)限(限)り(り)南(南)へ紀(紀)州(州)伊(伊)都(都)郡(郡)と(と)限(限)り(り)北(北)へ丹(丹)南(南)郡(郡)と(と)限(限)り(り)按(按)ず(ず)る(る)錦(錦)部(部)郡(郡)の(の)北(北)界(界) 天(天)野(野) 海(海)國(國)の(の)西(西)南(南)に(に)あり(り)泉(泉)別(別)の(の)界(界)七(七)十八(十八)町(町)に(に)置(置)き(き)高(高)低(低)同(同)く(く)た(た)漢(漢)流(流)の(の)水(水)若(若)草(草)多(多)し(し) 又(又)文(文)野(野)特(特)小(小)時(時)多(多)の(の)名(名)所(所)あり(り)て(て)益(益)も(も)富(富)ゆ(ゆ)り(り)多(多)し(し) 後(後)村(村)上(上)帝(帝)行(行)宮(宮) 皇(皇)居(居)今(今)の(の)食(食)堂(堂)と(と)稱(稱)す(す) 新(新)嘉(嘉)集(集) 天(天)世(世)の(の)り(り)宮(宮)と(と)稱(稱)す(す)後(後)は(は)今(今)の(の)中(中)に(に) 君(君)と(と)め(め)は(は)家(家)田(田)と(と)尾(尾)も(も)宮(宮)居(居)と(と)し(し)源(源)山(山)と(と)し(し)此(此)都(都)と(と)す(す) 藤(藤)原(原)忠(忠) 諸(諸)城(城)と(と)し(し)攝(攝)州(州)の(の)布(布)政(政)司(司)と(と)し(し)く(く)知(知)事(事)と(と)す(す)今(今)今(今)喬(喬)風(風)と(と)す(す)

二郡と珍努宮は下神護小由我宮とて一と西東とて 桓武帝都と平安城は 遷りたりとて交野東南部とて皇相後と南朝は建令楠氏守護は足利の代は 畠山高屋城は居一飯盛山とて好長慶と我と正年中小豊は考考とてとてとて 諸城とて攝州の布政司とてとて知事とて事と今喬風とて

○後醍醐天皇 人皇九十五代 御諱尊治 後宇多院第二皇子正應元年 十一月二日 誕生 嘉元二年十一月九日 御元服 同日叙三位 德治三年九月十九日 太子 立文保二年二月廿六日 踐祚 御年三十一 同二月十九日 御即位 延元三年八月十六日 崩 吉野如意輪寺 葬

尊良親王 一品中務卿 母贈從二位為子 若宮 一品御奥州宮 又号宇津宮

宗良親王 征夷將軍中務卿 母同上号妙法院明跡尊燈還俗 興良親王 遠州宮 天野周防守為檢

護良親王 征夷大將軍兵部卿初親本門跡還俗 隆良親王 征夷將軍母准后親安 於吉野被誅

世良親王 号文恪官尊之母兵部卿位高師親女 母宰相實俊女 女

恒良親王 東宮初坊 母阿野中將公廉女初侍賢門院

成良親王 上野太守 征夷將軍 御諱義良一品兵部卿母新侍賢門院阿野中將廉女

後村上院 正平廿三年戊申三月十一日崩御河州檜尾山觀心寺後山榮陵

忠尊法親王 聖護院母宰相實俊女 初号釋尊

懷良親王 征西將軍中務卿元中五年戊辰三月十八日薨去葬于肥後八代郡麓山 小國配流為名親 被誅

人覺寺宮 遠州興山法興寺岡山也 入唐の人

無文和尚

長慶院 御諱寬成文中二年癸丑二月御讓位 同四月八日御落飾法名金剛心 南朝四代

後龜山院 御諱熙成母嘉吉門院勝子近衛左大臣經宗女元中九年壬申 北朝明德三年和平十月五日御讓位奉太上天皇尊号應永

泰成親王 三十二年甲辰四月十三日崩御葬城州葛野郡北嵯峨福田寺後 式部卿太宰帥 後征西將軍 高福院 長祿元年十二月二日為赤松被害葬 和州吉野郡川上莊神野谷金剛寺

南帝 後村上帝即位後一入道親房常陸國より神皇正統記五卷を 獻せり是帝の女帝業子帝飾とありて後天戒師の青蓮院慈道法親王之 其時女帝一首の歌と尊法親王再遣一侍人

そひをさふた湊の一しほと色もゆるとみそめれ神 母業子 色かる神のねとれかたきくくも志をす神皇月か 母國親王

大正記云 け瀬吉野の新帝の内の天母の所と皇居とを勢の補た馬頸正儀和田 和名止武人之地殿小春と奏聞する富士山道通按東八箇國の勢は平

一と干萬勝じ小京都に着ていなる山陽道に播磨と限り上陸道に丹波成 後東海と南海と陸道の兵を起して上洛仕るるれ故の勢は定まる

處のゆくふといん但合致み放ると決定御方の捕とを料簡仕て其故を 軍士の謀を御所謂の時機の利人のむすはゆ中一も遠く討ち勢ありと

南方紀傳云

三十二年甲辰四月十三日崩御葬城州葛野郡北嵯峨福田寺後

式部卿太宰帥 後征西將軍

長祿元年十二月二日為赤松被害葬

和州吉野郡川上莊神野谷金剛寺

つとて掃東と海をこしとて今も昔も天の時み付く敵は明年より將  
軍西みまき東より二年塞之畠山に至る後東國とて是は已小の  
遠るはるをみれば地は利み付く案はみり方の陣後深山に連り敵案内と  
あはれ初まの河は流く僅る橋と路とせり左は元弘の千早の軍中事及び  
其後建武の乱より以来細帯乃同隆興の頼氏山名伊豆の時氏高武蔵  
師直同越後師泰今の畠山乃道乃誓み至るまで流小箇及び所不事  
勇猛とてひ戦と挑み敵の軍遂不利わたり或戸と河の道不曝し或名と  
敵の陣を破ひは是當山形勝の地要害便はるゆへとて敵はあつた  
思案は廻り今乃畠山が上洛と海とを我小備く忠賞を松本負へる志  
せしむる仁本細川の二族共はれ権威と精士岐佐と本が一類も其忠賞は  
あつたは是への心はせぬ所とて今も大地への徳をかく遠ひはる維故百  
あつたの勢と併りとも思ふ是乃所とて但今の皇居は流小箇乃所とて  
金剛山の奥觀心寺と中納言を極に進むとて正徳正武寺は流小箇の内

の勢と相付ひ今早金剛山より龍泉石川の志かけ出たり日る衣るわ敵は  
湯浅山本恩地野山本の兵共紀伊國の守護代信長中勢に外なく  
龍門山最初を陣と流小箇紀伊川先を陣伏と出たり國へ合攻を思ひ  
継ぎて戦ひしは短氣なる敵は勢なり退屈せしむる退屈して進む者なりは  
幸く進歩敵は千里の外遠敵は津運と時小南は是應をる所の合戦と事  
あはれ中事主と始進せし近侍の月卿を客小事とて皆あつたりは事  
なるは應と觀心寺皇居極に進むを陣をるるを川をえん念をるるは具  
はるは川をるる間事とて傳奏の上卿をえりは職事玉寄置持信は備府官  
人置事と具せられ外は地は皆流小箇と流小箇の討たはとて出たりは  
攝政園白大政官左右將命納言七辨八史五位後宮の義隆金上連部内事  
上臈女房出世房官小至るまで或は所於川入河若所十津川の方小流りて  
浦はけり山賊と小憂身と事ありありは志賀の古本流小箇の喬都系  
白のふさかて敵軍の中は浦を居る魂と消たりあり



のまのえんがす  
之野山金剛寺

表門

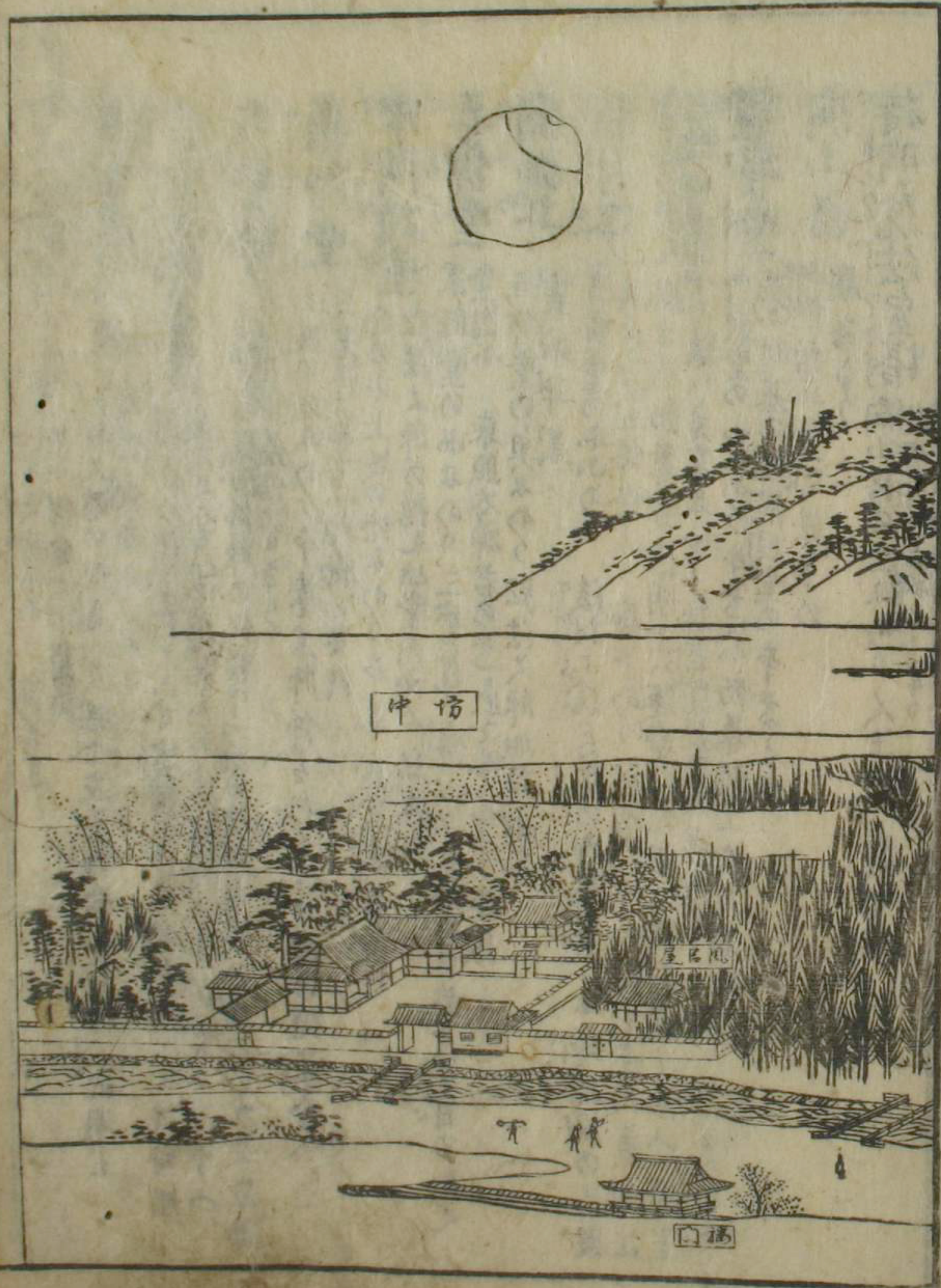
酒造

寺たのりや

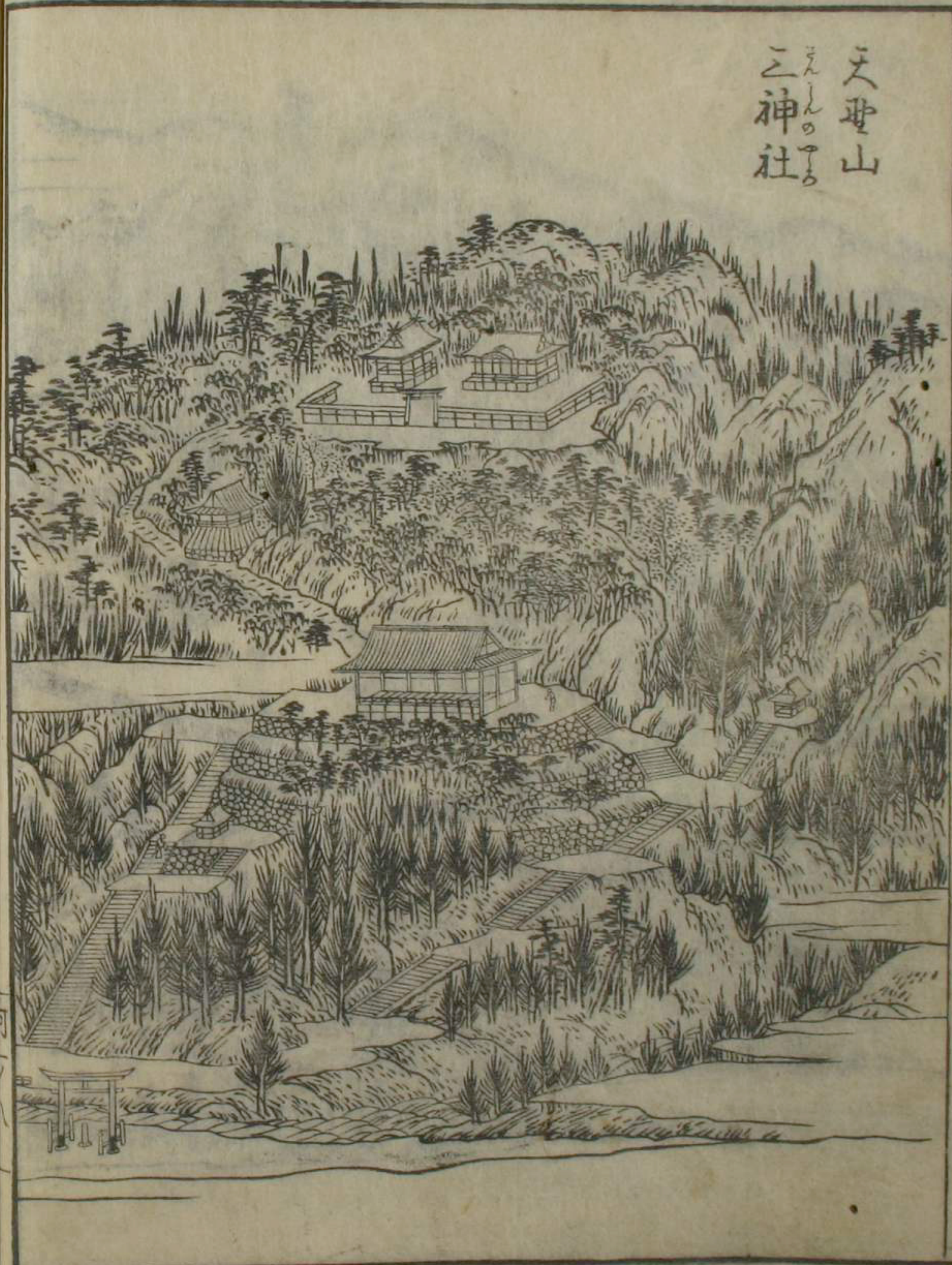
名のえ

要





天母山  
えんのやま  
之神社



大野山金剛寺三寶院

金堂之日如来 弘法大師の他長八尺脇士左不初明王右淨之世明王

食堂文殊菩薩 運慶の他長式尺寸宣願盧尊者堂内小安に同他

多寶塔之日如来 長式尺寸堂内延元年中後村上希御宮と一白入

藥師堂 上辰の地みあり本尊兼作伴と行基菩薩の他長八尺

求聞持堂 西の方上辰の地みあり本尊虛空藏菩薩

五佛堂 兼師堂の地みあり三寶院と稱に五智如来と安に長日の他

阿伽弁 五佛堂の奥みあり弘法大師加持水

觀月亭 五佛堂の小みあり後村上院月見の所設之今み座破風の所設

護摩堂 共行基の他權頂堂の本きと

阿山塔 阿觀僧正覺心法下の

持明院法皇塔 阿山塔の北みあり人王九十六代の帝

鎮守之社 南の方みあり天照太神兼財文

五本櫻 金堂のあ

樓門 額金剛寺 後白河法皇御猶と

丹生明神社 樓門の東山腰みあり丹生高聖水の神と依く之府成あり

鐘樓 和名細櫓まぐ十八間

觀音堂 満願院みあり

總門 法向金剛が土の二王と安に弘法大師の所他

之當之葛城の崇岡古佛傳輪の聖跡阿育王鐵塔奉収の聖域あり

て僧正行基の草創あり厥后弘法大師密法修り之密瑜珈の淨懺洗

星宿出ありく四百奉と奉るふ聖跡不荒廢に 後白河院淨宇永万奉

紀の南の沙門阿觀の衣高聖明神兼高聖若あり河内國大野澤に

はく廢蹟と興とく、と阿觀とと瓜瑞とく昂錫と飛一山小至るそ箇





天野山什寶大畧

两部大曼荼羅 二幅弘法大師著初葉中あり 同種子曼荼羅 中興阿觀

釋迦之尊種子 中將法比丘尼自製の鬘髪を以て之を纏之申一俗小

佛舍利 五粒後白法皇山再興の時 東寺傳來佛舍利 後村上院所寄附

之笠阿育王鐵塔 日本之箇の聖寶の其一あり 感深し申あり

最勝王經 紺紙金泥 法華經阿結 紺紙金泥 光明皇后所寄

之毘婆沙論 光明皇后 稱讚淨土經 中將法尼 法華經 同寄 紺紙金泥

寶篋印陀羅尼經 明惠上人 念珠之連 阿觀僧正 持也

能作生玉 一顆弘法大師 鈴五銚 明鏡 三持日大師 持也

泥塔一基 日大師 不動障之世尊 宅在法眼院所寄 御雨の靈應あり

阿弥陀佛 宅在 釋尊 張思恭 法華經法像 巨勢金剛 寄

同講本尊 同寄 陀羅尼品像 北典主 愛深明王 興教大師 寄

之威德明王 阿觀僧正 六觀者 寄

弘法大師御廟出現像 觀賢信正寄 聖山觀音 廟所寄附の附大師 出現し 佛と其影とを撰し あり

後白河院心本代々繪肯院宣 二十九通

後鳥羽院建之架繪肯 十五通 大官家文書 二通

右之將頼朝卿已未代々將軍家文書 早九通 太閤秀吉公御書 八通

楠方儀門尉正成自筆 二通 同正行正時正儀等書翰 十一通

寶劍 長式尺寸銘 同 長二尺 同 長九寸六分 同 此寶劍三柄共阿觀僧正持也

高麗笛 聖德太子 所持 琵琶 銘雷沖 同 式面 笙 一管 已上四持 後村上院所寄附

笙 銘荒丸 同 在管銘鈴凡已上二品 同 信貴山頼尊也

太鼓 鞆鼓 鉦鼓 以上三品 後村上院 緋威鎧 持也

古皮具足 旗指物 楠家 持也

山水屏風 雙心 讀 同 古法眼之信 同 土佐光信女寄

徒太鼓 小鼓 六挺 自是已下坊中慶尼院什室 同

菊水旗 菊水の紋あり之非理法憲天の 秘傳兵書 二十一帖 五文字に成の名俱不真也







鳥帽子形八幡宮

河合寺



楠公遺愛碑

服元高撰  
烏石山人書



かみこ  
俗龜房



下くまきまのりおそその秀のまなき龍泉のいれ本戸にありと名同る小関成  
さりとて細川相模守清氏と赤松孝亮弟龍泉と二十山陣さるる居るなる龍泉  
の縁故はてアヤ小先とかけらぬる但城切て入るる事又一文事とせしむる真  
此先鋒といふが馬を鞍掛け旗を志げといふ程まで有る相模守と赤松と龍  
泉と肩あけけ道と高段かたき龍泉のいれ一城戸高橋の下にお上りり

横山天神祠

横山村西條川の東涯小あり其側の藪の標より潮水涌出る

西條川

石見川といふ大井壺京觀心寺等公經く三日市川に入  
三日市川といふ長聖に至つて西條川といふ一紀見嶺の北より

流く石伴村より石伴川といひ新町に属く三日市川に入  
一八九年峠より出く巖湧山の麓にあり加賀田村に經く  
石伴川に入一八歳王峠より出く流細日野を向上原と展く  
長聖より西條川といひ流く西條川

金胎寺古城

舊村の上方小あり建武年中 勅軍つて木橋を枝城十  
七ヶ所の其一と寛正年中 島山殿就も亦きた

寶珠山河合寺

河合寺村の中小あり

本尊十一面觀世音

長そ尺六寸許脇士金胎兩部之目さ又不勅明王  
毘沙門天成安に横山城の守本尊なり

鎮守春日神祠

本堂の側小あり河合寺村生土社と云

河合寺碑

堂ありあり銘は南朝 先生系へ鳥石山人なり  
寛保三年秋八月建 其銘云

河内挾山晁子君采以邦大夫世采其封南河合邑  
邑有河合寺邑名焉記曰古者 皇極帝二年勅建  
列朝相繼奉信增脩以至南朝 寂為崇觀與州之觀  
心金剛兩寺屹為三大利勅旨數奉禱事勝國之亂  
諸閣壞廢大半而其國宣及楠氏所令手書至今藏  
鎮焉晁子之立碑於此為寺觀微乎存乎曰否為尚  
楠氏也何以尚之為楠氏遺愛也古者楠氏盡忠乎  
興國正平時南北戰爭數十年矣誠節貫天地知略  
盖四海恢復之功雖不成全其子其孫三世志業不  
渝實與南朝社稷相終始焉天下後世至于今時莫



不感激出涕喜言其事焉是為遺愛也為楠氏遺愛  
 衆矣曷為獨於此河內與泉攝當其時楠氏世守也  
 前此攝有湊川碑泉則未聞焉爾而河內其所基據  
 遺愛尤存金剛千早城趾也何以不碑焉晁子曰吾  
 嘗略行金剛千早一石不存噫蓋竟外爾蓋河合碑  
 則晁子遺愛乎我也遺愛乎我者遺愛乎已也因祖  
 之所遠聞而石乎私土甘棠之遺焉往而不愛以君  
 子之為亦有樂乎此也楠氏之功德天下後世至于今  
 時莫不感激出涕喜言其事焉所見同辭所聞同辭  
 所傳聞同辭是謂口碑備矣不必具列其事則不獨  
 其遺愛也寺觀雖微乎存後此以楠氏重則楠氏之  
 亦獨遺愛於此也此立石之志也寬保三年秋八月  
 服元喬撰烏石書晁泰亮立



觀心寺  
表門



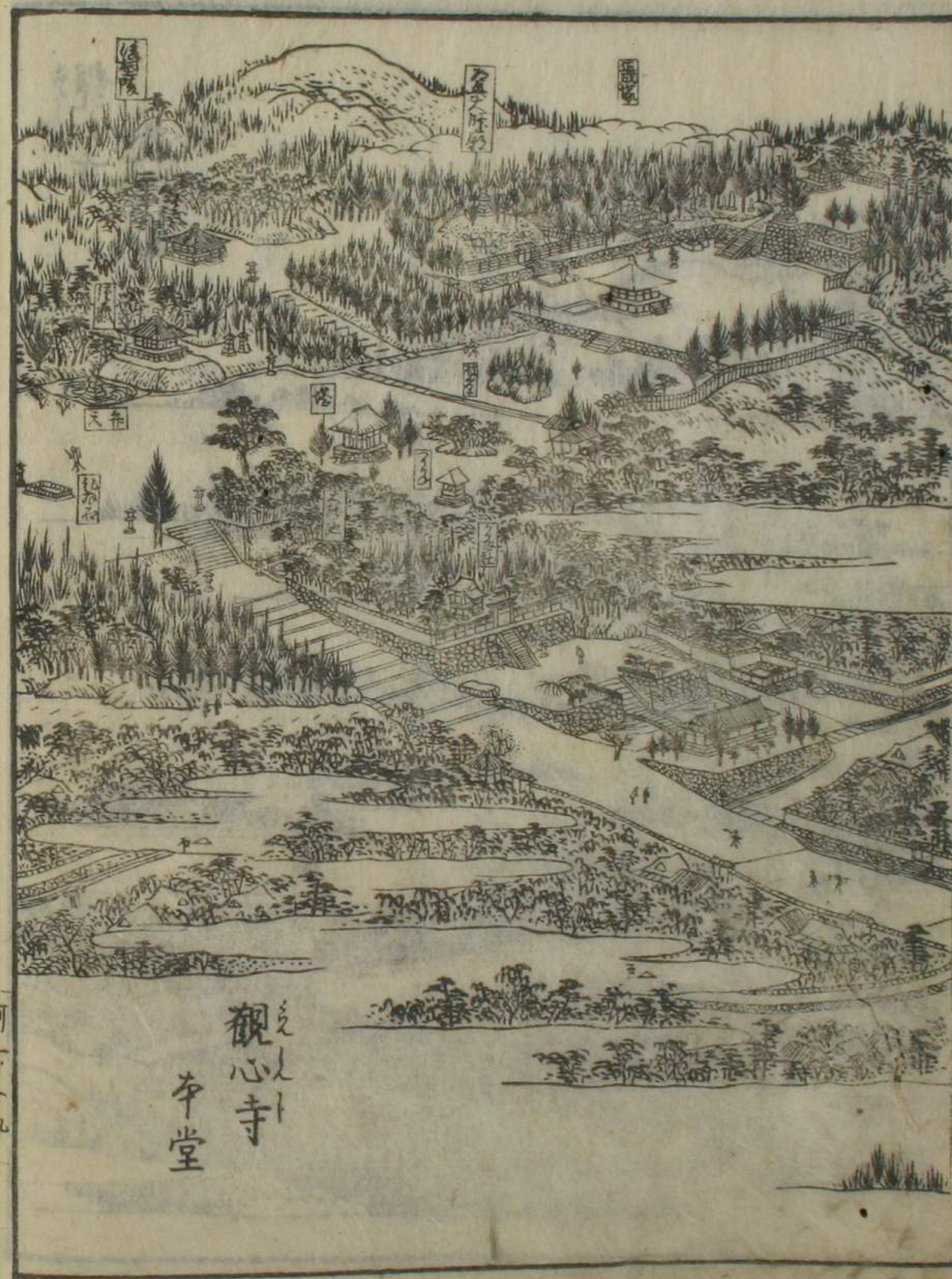
楠河州墓

勤王汗馬出轅門  
 酬得一朝雨露恩  
 莫道南天將星落  
 餘光千載照乾坤

吉田質

○平  
 上左  
 小左

院中法



觀心寺  
 本堂

河  
 六  
 十九



古きや  
 杖悲し  
 佛達  
 八橋  
 後村と帝の沖渡り  
 八隅と君の  
 浄土も代々  
 正質



観心寺  
 裏門  
 雀子や  
 菜々  
 昔さる  
 塔の  
 心録  
 信光  
 寸馬

檜尾山觀心寺

觀心寺村あり

本尊七星如意輪觀世音

建挂塔

淨觀堂

賀利帝母社

行者堂

閻伽井

礼拜石

系櫻

實惠上人廟

南正成首塚

弘法大師御長計尺八寸脇士不勤明王計尺六寸六分

愛深明王計尺六寸九分

生持陀經迦と安す楠正成遠立の

後篇よ出せり

一切経と納む

厨子長九寸計分本佐

金堂の東池の中

七星降降所

招結玉井

賀利帝母社の

俗姓法

密法

故と稟く天長に年観心寺と建

承和十年十一月十三日寂

本願院

安す長計尺六寸六分

南正成首塚

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

延元元年五月廿六日

畠山尾張守墓

正成塚の

播成位欽書

孫衣散緇袍與衣狐貉者

國於聊不忠之輩不可為

所補三州之守誠莫大之

謂曰溥天之下莫非王土

率土之濱莫非王臣爾況

君恩也不如一節以死報

我子弟于茲家族守訓言

有餘歲美名存乎不肖流

立而不耻思惟先祖之餘

後村上院陵 藤原の奥武町詳みあり 崩を古聖

南朝正平廿四年 北朝應安 二月十日南帝 院 崩を古聖

如意輪寺小尊 後村上院と遷奉る同年冬十月足利官領

細川頼之南朝 奏圖申挿へ古の如く持明院殿と之覺寺殿

と一代かりり 不浄治世ありて二種の神器と北朝一浄波

備しく南小浄和隆遊 南帝浄上洛ありて公家武家の

本領卒の如く 異小官加階相遠ありて再之奏圖と

之とも南朝の公卿武家等 これを用てて和隆洞奉る

以時南朝の領地 河内之和泉紀伊伊賀伊勢志摩飛騨

信濃上野越中越後伊豫備 石見長門肥後日向大隅

薩摩小園小征東將軍宗良親王 九州小征西將軍良懷親王

勢初小北畠の園司かり またん

同記云 南朝天授二年二月十日南方 後村上院の浄七回忌若聖如意

論寺小於く大法舎あり導師ハ日聖又傍正頼意其時宗親王  
和奇と詠く頼意へ送り申

幾まうちそ見たりんうかじりたりも昔れつらふ  
志すともん 世のまはつらふとあつたてあつた面鏡 頼意送心

四つのとた九の如く ふとみたりきのあはまとおやらかぬすた 南帝製

南方の皇居ら金剛山の奥観心寺と云 深山をれば左右かく故の

迎くぬた所 るね共行候の御警固も憑思居んる龍泉赤坂も

為され又昨日一昨日 浄方せし兵也も今日ち多く浄教し成ぬ

と聞てくふ人 松人素内者 主上とて 女院皇后月卿を容

あいつく ををたと懼恐れさせ申し車限か

観心寺官符曰 寺壹院 在河内國錦部郡石川郡西郡南山中



德無二懇志巧妙造作也密納寶庫不可出外  
戶矣  
右勘錄大概如件  
美和四年三月三日

太上天皇 奎璽有之  
真雅  
實慧

此寺記弘法大師の上足真雅實慧  
上人の勘録ありて後小松院の  
宸翰あり則此書判なり

此一事銘並奥書系一被深  
一書後代龜鏡治の概明時風編也  
應永癸巳估洗中辨

閔白經嗣判

御綸旨  
禁裏御尊愛保王儀就被安至當寺内陣  
永代物預長日行法事編有也此鎮令  
候五持相應洋業宜年新四海傳平  
聖化く中依東寺長者法務傍正所房作  
執達必件

正永十五年正月十八日

法下仲尊

觀心寺傍本

親心御編旨  
心寺内陣常燈為永代不朽物願所被始至  
也心紀伊國正稅等儀急の致沙汰く中被作  
天司く早可く下知寺家給者依  
天氣云上必件  
正永十五年四月八日 時長 頼首 滋 忍 等  
進上  
東寺長者曾正所房

東寺長者曾正所房

楠正成書  
此引外不初うを後く中下  
寺傍は必の候八日等系着人候  
惡く候く之候共上候人候  
十月廿六日  
正成判

勝貫口房

正行書  
頓作佛造營至為所遷宮返く目出及存入人  
必く奉請人 怨  
十二月一日  
正行判

觀心寺傍中

正統書  
觀心寺位侶等申當寺度立職奉申狀書  
進上之細載狀免公社方可方許披  
悉收  
二月三日  
左内尉正儀判

建上御奉行百

河内  
先例可被被管領以也仍執連如件  
西平五年四月十三日  
左内尉判

右の古綴判と花押蘇も正時也とせらるる  
月十日大和守小住正時之改名正平四年巳丑正月六日酒州口條  
以外南朝國宣及櫛氏畠山等書寫空奉小満  
去是公者くあく其一二を奉防而三

坊中植本院畧品

茶壺 二銘 待宵 十六表  
豊臣太閤所持

太刀 二腰 銘一行平一正宗楠之持  
行平南朝天子より奉領

牧溪 觀者 舜恭 芥子 趙子昂 杜律詩意 若舟 觀者  
唐畫 唐畫

呂輝 孔雀 名村 朱買 秋月 二笑  
臣

坊中中院什器

青貝素鞍 絛絨腰卷 何れも楠之持常院不考附の書銘  
名劍多  
觀心寺兩門再興江州志賀郡膳所賦立奉多後吹度之表

八幡宮 觀心寺依此あり年頭天王と係せ奉り地障七ヶ村の  
生土神の例系九月九日

旭原 觀心寺の巽ありこれ大和街道之續日本紀云 文武奉二年  
向徳之敷と昂は所之故不名及ふ

三岳神祠 石見川村あり又社の東小使役場あり一名川社と云  
は所の生土神と云

高向玄理 錦郡郡の人 推古天皇十六年 階小入く學受ケ  
寄明天皇十二年 淨朝を階小在る事 都く二十年 羅國  
博藏宏和より文化元年 遣大唐押使大兼上と授く唐入く  
小使の朝觀の東宮監門郭文舉といふもの 本郡の地理及び  
國初神名 應答 流すぐめ 唐人其語敏と  
稱れ 高向玄理 大寶二年 依血位上政事と參議せし免慶長元年

高向麻呂 日那の人 難波の朝廷刑部尚書大花上國忍の子  
大寶二年 依血位上政事と參議せし免慶長元年



中納言小任從和銅九年從三位小叙  
 攝津大友小任從同八月薨  
 僧善議 錦織の人の戒體嚴淨みく論ハ道長  
 師とく博識洽聞具凡の智徳之

河内名所圖會卷之一 終

河内名所圖會

らんがき  
 清月捨

中  
 市町守下法鏡  
 承念  
 印

波  
 光  
 井  
 傳

